

# GLOBAL VOYAGE

[グローバル ヴォヤージュ]



ア  
ー  
ト  
で  
巡  
る  
世  
界  
一  
周

第二特集

クルーズで巡り会える  
世界の植物

[発行](株)ジャパングレイス



# アートで巡る世界一周

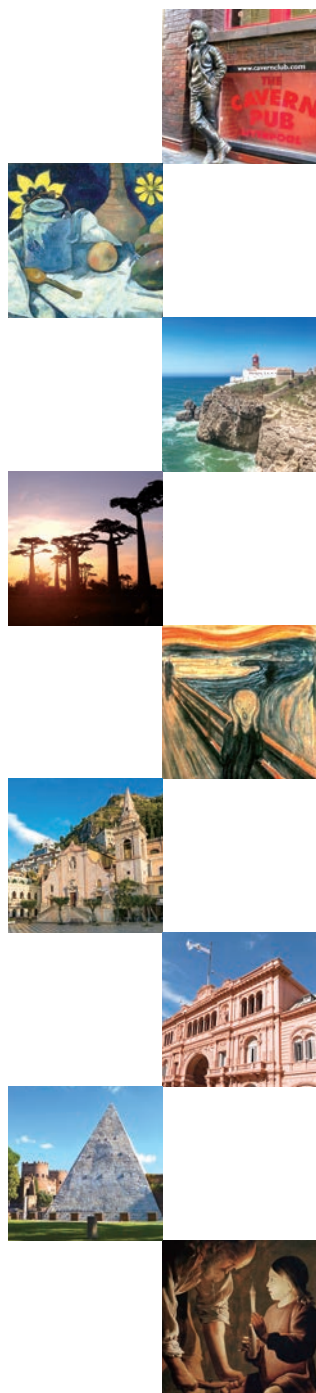
文芸研究家 カジボン・マルコ・残月さん

「カジボン・マルコ・残月」さん。文学や音楽、映画のコラムを執筆する一方、ライフワークとして歴史上の人物や芸術家の墓を巡礼する「墓マイラー（お墓参りをする人）」としても知られている。またピースボートクルーズでは水先案内人としてもお馴染みで、乗船者のなかには、カジボンさんと出会い楽しいひとときを過ごした経験をもつ方もいるだろう。今号はカジボンさんのナビゲートで、古今東西の芸術とともに世界を巡ってみたい。



## カジボン・マルコ・残月

文芸研究家・「墓マイラー」。1967年生まれ。大阪府出身。大学時代に文芸研究会を旗揚げ。34年間にわたり101カ国、2500人以上の墓巡りを敢行。自らの造語「墓マイラー」は『大辞林』『現代用語の基礎知識』に掲載された。講演や執筆活動などを主な仕事とする。ペンネームは本名の梶本と『母を訪ねて三千里』の主人公の名前、マルコを掛け合わせたもの。「残月」には、文芸研究家は芸術家という「太陽」という存在があってこそ輝ける「月」のようなもの、自分はその端くれという意味を込めた。最新刊は『墓マイラー・カジボンの世界音楽家巡礼記』（音楽之友社、2020年11月）



GLOBAL VOYAGE  
2021 Spring

## CONTENTS

### 特集

文芸研究家 カジボン・マルコ・残月さん

アートで巡る世界一周…………… P3

墓マイラー・カジボンはどのように生まれたか  
カジボンとピースボートの出会いと歩み…………… P4

文豪ゆかりの地を訪ねる  
小説の舞台に胸躍らせる…………… P6

映画の名シーンがよみがえり  
心に残るメロディが響いてくる…………… P8

唯一無二のアートを鑑賞できるのも  
世界を旅する醍醐味のひとつ…………… P10

まだまだ紹介したい  
たとえばミュージカル…………… P12

### 第二特集

クルーズで巡り会える

## 世界の植物

クルーズでおすすめしたい世界の植物園…………… P13

情熱的で華やかな世界三大花木…………… P14

世界一周を彩る世界の花・植物…………… P15

東日本大震災から10年  
ピースボート災害支援センターの歩み…………… P16

ピースボート災害支援センター10周年  
東日本大震災とコロナ禍の7月豪雨災害  
かつてない被災地支援について…………… P18



# 墓マイラー・カジポンはどのように生まれたか カジポンとピースボートの出会いと歩み



〈ドストエフスキー巡礼〉  
「私の恩人に涙の墓タッチ  
をしているところです」

墓は石ではなく人そのもの  
人と思っているから何度も会いに行く

カジポンさんがこれまで墓参りをした偉人は2500人以上、日本はもちろん世界100カ国以上を訪れてきた。なぜ墓参りなのか。「それは恩人に感謝の気持ちを伝えるためです。素晴らしい小説や絵画、映画を鑑賞し感動したなら、ありがとうを伝えに会いに行きたいじゃないですか」とカジポンさんは言う。

墓マイラーの出発点は、旧ソ連のレニングラード（現サンクトペテルブルグ）。19歳の夏のこと。10代最後の思い出に、両親以外でこれまで最もお世話になった人にお礼を言いたい、と思ったカジポンさんが向かったのは、ロシア文学の巨匠ドストエフスキーの墓だった。「人間の醜さやダークな部分をあらわにしながら、その裏に深い人間愛がある作品に何度

も心を救われた」からだ。墓に触れ「スパシーバ！（ありがとう）」と祈り、墓の下に大文豪がいると思ったとき、「本当に実在したんだ！」と息がでなくなるほどの感動に包まれた。「脳天からアートのサンダー（芸術の雷）が体を貫いた」そうだ。

ようやく一息ついて、迎りを見回すと、なんと斜め後ろにチャイコフスキーやムソルグスキーという、名だたる作曲家たちの墓が並んでいた。墓地を出るとき、カジポンさんは思った。「自分が感銘を受けたすべての芸術家に会いに行かねば」と。「私にとって墓は石ではなく人そのもの。人と思っているから何度も会いに行けるし危険な場所にも行けるのです」。それが墓マイラーの矜持である。

《チャイコフスキー巡礼》  
「胸像付きの墓は光が射すと  
グッとドラマチックになります」

## 失恋という灰のなかに 芸術というダイヤが残った

カジポンさんが芸術にふれるきっかけは高校時代にさかのぼる。まず、美大志望の後輩に恋をして「絵画に詳しくなれば彼女の気を引くことができる」と美術を猛勉強して告白するも、あえなく失恋。その後も音大生、図書館司書などに恋をするたびに音楽や文学を猛勉強するが、ことごとく失恋。その数、片手では足りないが「失恋という灰のなかに芸術というダイヤが残った」のだ。

現在は「文芸ジャンキー・パラダイス」というサイトを運営し、あらゆる芸術ジャンルの情報を発信しつつ、音楽、映画などの専門誌への執筆や講演など幅広く活躍中。それでもちろん、ライフワークとして墓巡りを続けている。



1



2

1:《トーベ・ヤンソン巡礼》ムーミンの作者として知られるトーベの墓は故郷のフィンランド、ヘルシンキにある。2:《シャトー・ブリアン巡礼》ロマン派文学の先駆者はイギリス海峡を望むように眠っている。



3



4



5

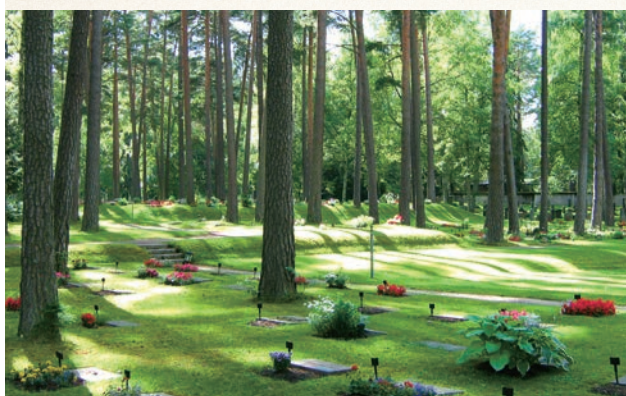
3:《ベートーベン巡礼》メトロノームの形をしている「楽聖」の墓。4:南フランスの田舎町セリニャンに眠る昆虫学者ファーブルの墓を巡礼。5:22年間の膨大な芸術情報が詰まっているカジポンさんの運営サイト「文芸ジャンキー・パラダイス」。

## ピースボートが、墓マイラー・カジポンをつくってくれた

そんなカジポンさんとピースボートとの縁は深く、かれこれ30年以上になる。1990年、ピースボートが初めて世界一周を巡ったクルーズにも乗船している。「当時世界一周が400万円以上する時代に、90万円代で行けるなんて、まだ学生だった僕は飛びついたんです」。船内で芸術紹介の自主企画が好評を得て、その6年後の世界一周クルーズに再び乗船した。2000年には正式に水先案内人となり、現在まで計23回のクルーズに関わってきた。

「ピースボートは普通の旅では行かないような国、場所を訪れるし、治安や交通費の面で行きにくい国に寄港してくれる。墓マイラーの私にとって最高のパートナー。ピースボートがなければ、裕福でもない私は世界を旅することもできず、現在の墓マイラー・カジポンは存在していないでしょう。たとえば、ほんの一例ですが、サモア諸島のスティープンソン、アルゼチンのエビータ、キューバのチェ・ゲバラ、スリランカのアーサー・C・クラーク、などの墓は、ピースボートだからこそ行けた場所です。墓マイラーとして、文芸研究家として、ピースボートに感謝しています。そしてこれからもよろしく！」

そんなマニアックなカジポンさんに、芸術を語りながら世界を巡る旅をナビゲートしていただく。



スウェーデンにある森の墓地スコグスシュルコゴーデンは世界遺産に登録されている。女優グレン・ガルボをはじめ著名な人物の墓も多い。





## 文豪ゆかりの地を訪ねる 小説の舞台に胸躍らせる

文学を愛する方は、名作といわれる小説や詩の舞台となった国や土地を巡るのもクルーズの大きな楽しみになる。国内外200人以上の作家、詩人の墓巡礼をしているカジボンさんが、クルーズの寄港地とゆかりある小説の舞台や作家のエピソードを紹介する。



ユーラシア大陸最西端のロカ岬。大西洋の風を受けて詩の一節が刻まれた記念碑が建っている。



庭園とアトラクションがセットになったデンマークのチボリ公園。アンデルセンゆかりのコペンハーゲンにある。



サントペテルブルグは街そのものが美術館のように美しい。ドストエフスキー文学記念博物館には貴重な遺品が展示されている。

長い船旅のお供に一冊の本を。  
おすすめは『白鯨』

まず、船旅に船上で読むに相応しい一冊としてカジボンさんがあげたのが、メルヴィルの『白鯨』だ。アメリカ文学の最高峰。「白鯨は神や運命の象徴であり、これは生と死の物語。読み進むうちに、あなたも船長エイハブ率いる捕鯨船ブークオド号の一員として航海し、ともに喜び、悲しみ、驚き、熱狂していくでしょう」。ジュール・ヴェルヌの『八十日間世界一周』も船上読書にぴったり。「映画化もされていますが、ロンドン、エジプト、インド、香港、ニューヨークなどに寄港するクルーズなら、船旅がいつそうワクワクしたことになりますよ」。

目に見えない大切なものを  
手に入れるために

サンテグジュペリの『星の王子さま』を読んだことがあるなら、マダガスカルで「ぜひ巨大なバオバブの木を見てほしい」とカジボンさんは言う。小説に登場する不思議な木が、このバオバブだ。小説のなかのバオバブは星にダメージを与える怖いイメージがあるが、「実際に見たマダガスカル

のバオバブの木も、近年は森林破壊の影響で危機を迎えており、ピースボートでは苗木を植林するプロジェクトも行っている。

ちなみに王子とサンテグジュペリのツーショットの銅像は、故郷フランスのリヨンに建っている。ローマ時代から栄えたこの街には世界遺産も多い。寄港地のマルセイユから鉄道で2時間。「星の王子さまには有名な『本当に大切なものは目に見えないものなんだ』というセリフがありますが、旅の価値である、人との出会い、心に残る光景もまたカタチとして残らないもので、通じるものがありますね」。

人魚姫に会いにコペンハーゲンへ

『人魚姫』や『みにくいアヒルの子』をはじめとする作品で知られるアン



樹齢1000年を越す神秘的なバオバブの木が生息するマダガスカル。『星の王子さま』にも登場する。



デルセンは、デンマークの童話作家・詩人である。「アンデルセンの墓は、コペンハーゲン駅からトラム一本で訪ねることが出来ます。水先案内人として乗船したとき、乗客を案内したこともあります」。コペンハーゲンの港の近くには人魚姫のブロンズ像がある。そのほか世界最古のテーマパーク・チボリ公園、シェイクスピアの『ハムレット』の舞台としても知られる世界遺産クロンボー城なども巡ってみたい。

地の果てで、大航海時代の  
ロマンに思いを馳せる

「まだ行ったことがないけれど、ぜひ行ってみたい場所のひとつ」としてあがつてきたのがポルトガルのロカ岬。ユーラシア大陸の最西端に位置し、リスボンからバスで訪ねることが出来る。断崖絶壁の岬に建つモニュメントには、ポルトガルの詩人ルイス・デ・カモンイスが大航海時代の航海者たちを描いた叙事詩の「ここに地終わり、海始まる」という一節が刻まれている。果てしなく広がる大西洋を見渡し「地の果て」から、地球の大きさを感じてみたい。

「ロシア文学ツアーを希望！」  
とカジボンさん

文学といえば忘れてはならないのが、世界に名だたるロシア文学。カジボンさんの墓マイラーの出発点になったドストエフスキーはじめトルストイ、チェーホフ、プーシキンなど、文学の巨星たちとゆかりが深い都市サントペテルブルグは、芸術と世界遺産の宝庫で、訪れる観光スポットには事欠かない。「ツアーでの自由行動はできませんが、実はドストエフスキー文学記念博物館やロシア文学博物館には、大作家たちの筆記用具や眼鏡、パイプといった愛用品も展示され、身近に感じられてグッとくるんですね。ですから、ピースボートクルーズでそういう、ロシア文学の足跡を辿るツアーをぜひつくってほしい」と期待しています」。



ローマにある、古代ローマの執政官ガイウス・ケステイウスのピラミッドの墓。外国人墓地にもなっており、英国のロマン派詩人キーツとシェリーもここに眠る。



カジボンさんが「最近読んだなかで最も印象に残る作品」とするガルシア・マルケスの『百年の孤独』。その故郷コロンビアの観光都市カルタヘナ。



### カジボンの墓マイラー巡礼記 [文学・詩人編]



ジャン・コクトー (フランス)

多方面で活躍したコクトーの墓を納めた教会。内部にはコクトーの壁画が飾られ、コクトーが自作を朗読したテープが流れている。



アンネ・フランク (ドイツ)

『アンネの日記』の著者は、終焉の地となったベルゲン・ベルゼン強制収容所の跡地にて姉のマルゴットと眠っている。享年15。





## 映画の名シーンが よみがえり心に残る メロディが響いてくる

時代を超えて愛される名画には、誰もが知る名シーンがある。世界中で歌われる名曲には胸に染み入ってくるメロディがある。ロケ地やアーティストにゆかりのある街を訪れると、その感動が新たになる。「おすすめしたいところは山ほどあります」というなから、カジボンさん厳選のナビゲート。

自然に恵まれた街の美しさが  
メロディに反映される

「ノルウェーの作曲家グリークの墓は、西部ベルゲンの郊外トルルハウゲンにあります。10メートルほどの崖の真ん中にあるという、世界でも珍しい墓です」。これは故郷の自然と海を愛したグリークが、フィヨルドを望む場所にと選んだらしい。同地にはグリークが42歳から64歳で亡くなるまで過ごした家が博物館として公開されている。大自然を前に

曲の構想を練った姿が思い浮かぶ。名曲『朝』を聞きながら街を散策するのも爽快だろう。

世界中の人々に受け継がれる  
「ラブ&ピース」

ニューヨークのセントラルパーク内にジョン・レノンのメモリアル広場ストロベリー・フィールズがあり、そこにIMAGINEの二語が刻まれた円形の追悼碑がある。オノ・ヨーコはここにレノンの遺灰を撒いたとされる。

差別や貧困のない世界を訴えた  
不世出のシンガー

ジャマイカはカリブ海に浮かぶ小さな島。美しいリゾート地として賑わい、自然も満喫できる。流れてくるのはやはりレゲエだろう。ジャマイカの音楽シーンは世界的アーティストを輩出してきたが、レゲエの先駆者の一人ボブ・マーリーのカリスマ性は格別だ。レゲエはダンス音楽ではなく、人種差別や貧困への抗議を歌詞に託し、明るい楽曲にして歌っている。生まれ故郷のナインマイルに墓があり、生家も観光スポットとして残されている。

民衆とともに歌い、戦ったチリ  
民主化運動の英雄

「チリに行くならビクトル・ハラ  
の歌を聴いてほしい」とカジボンさん。  
フォークシンガー、ビクトル・ハラは、



「朝」の爽やかなメロディで知られる作曲家グリーク。故郷、ノルウェーの西岸ベルゲンの自然の美しさ、民族性への愛が音楽に表現されているといわれている。

一年中、世界中から人々が訪れ、レノンの命日や誕生日には特に大勢のファンが集まり、ギターが演奏され歌声が響く。「追悼碑が墓地でなく公園にあるお陰で、誰でも行けて、多くの人が集えます。まさにラブ&ピースを象徴している気がします」とカジボンさん。広場の真向かいに歴史建造物に指定されているダコタハウスがそびえている。セントラルパーク内は映画のロケ地などでも多く使われており、レノンを偲んだ後も見どころはたくさんある。

神殿で、息を呑むほどの壮大さ、またピンク色をした岩も素晴らしい景観です」。

シチリアの田舎で名シーンが  
目の前に浮かんでくる

「イタリアのシチリア島などに寄港するクルーズに乗船予定の方は、二つの映画をおすすめしたいですね」。それは祖国を追われた詩人がナポリ湾の島で地元の青年と友情を育む『イル・ポステイノ』と、シチリアの小さな村を舞台に映写技師と少年の交流を描いた『ニュー・シネマ・パラダイス』。映画ファンの涙を絞った名作だ。『イル・ポステイノ』はノーベル文学賞を受賞した、20世紀最高の詩人の一人とされるチリのパブロ・ネルーダの実体験にもとづいて映画化されている。これを観てから島を訪れると、心あたたまる映画のシーンが鮮やかによみがえってくるだろう。



「ニュー・シネマ・パラダイス」の舞台になったシチリアは観光スポットが多い。タオルミーナの4月9日広場もその美しさで知られている。



『アラビアのロレンス』の舞台になったヨルダンのワディラム（月の谷）。ロレンスが大好きなカジボンさんにとって印象的な寄港地。



1:故郷リバプールにある日本語オーディオガイド完備のビートルズ・ストーリー。2:セントラルパーク内にあるストロベリー・フィールズのIMAGINEが刻まれた追悼碑。



### カジボンの墓マイラー巡礼記 [音楽・映画編]



ビクトル・ハラ(チリ)  
民主化運動の英雄は、軍によるクーデターの際に捕われた多くの人々と共同墓地に眠り、献花が絶えることはない。



イングリッド・バーグマン(スウェーデン)  
スウェーデン出身の名女優、イングリッド・バーグマンの墓。遺灰はストックホルム北霊園の両親の墓の隣に埋葬されている。





ルーブル美術館のカジボンさんおすすめは17世紀の画家ラトゥールの『大工の聖ヨセフ』。ローソクの灯に少年キリストの指が透き通って浮かび上がり、繊細な表現に見入ってしまう。



『叫び』シリーズで知られるムンク。今年オスロに新ムンク美術館が開館した。



ニューヨーク近代美術館に所蔵されカジボンさんがゴッホの最高傑作のひとつと評する『星月夜』。



ゴーギャンが創作活動の場として選んだのは地上の楽園タヒチ。この地で『タヒチの女』『マンゴーとティーポット』はじめ数々の傑作が生まれた。



タヒチで生まれたゴーギャンの傑作は世界各地に

「絵画は私の好きなゴーギャンから話していきましょう」。ゴーギャンの傑作の多くは晩年過ごしたタヒチで描かれている。パリで絵がまったく売れないことに嫌気がさして、最初はタヒチ島に3週間、二度目はさらに奥まったヒバオア島に住んだ。「ゴーギャンの作品はメトロポリタン美術館、オルセー美術館はじめ世界中の美術館で鑑賞でき、黄色やピンクの大地と濃い緑がとても印象的

世界最大級の美術館で一番のおすすめ作品

ルーブル美術館は『モナリザ』『ミロのヴィーナス』をはじめ、世界的に著名な作品が多く公開されている。カジボンさんのおすすめは、夜の画家「ラトゥール」とのこと。中でも『大工の聖ヨセフ』は少年のキリストが大工仕事をしている父にローソクの灯を掲げているシーンが描かれている。「私がルーブル美術館でいちばん好きなのがこの絵です。陰影の美しさが際立ち、キリストの小さな手がローソクの灯りで透けていて、ため息が出るほど素晴らしいです」。

文化施設が多いノルウェーの芸術都市オスロ

ノルウェーのエドヴァルド・ムンクは『叫び』の作者として世界的に知られている。一度見たら忘れられないインパクトのある作品だ。「ムンクの作品はオスロ国立美術館とムンク美術館に所蔵、展示されています。後者は今年、新ムンク美術館として生まれ変わったので次回訪ねてみたいですよ」。オスロではこのほかお国柄としてヴァイキング船博物館なども見どころである。

## 唯一無二のアートを鑑賞できるのも世界を旅する醍醐味のひとつ

です。光と影の素晴らしいさを鑑賞してほしいと思いますし、タヒチを訪れるクルーズなら、ぜひ作品の雰囲気を感じてみてくだささい」。

強烈な色彩で魅了するゴッホの作品群

ゴーギャンといえばゴッホである。1888年、ゴッホとゴーギャンはフランス南部のアルでわずか2カ月間だが共同生活を送っている。ゴッホは歓迎の気持ちを込めて、ひまわりの絵を描き、ゴーギャンの部屋に

世界の巨匠の作品が集まっているバチカン

バチカン市国のサン・ピエトロ大聖堂に収蔵されている『ピエタ像』は「世界最高の彫刻作品のひとつ」とカジボンさんという。十字架から降ろされたキリストを母マリアが抱きかかえている姿が描かれている。「悲しみをたたえた作品は大理石で彫られているのに、まとった布に指が入っているような柔らかさを感じます。人間業と思えません」。このほか世界遺産バチカンには観光、美術鑑賞の見どころがたっぷりある。

バルセロナは世界屈指の芸術の都

「バルセロナに初めて行ったのは1990年で、サグラダファミリアもまだ中心部は手付かずに近い状態でした。当時は完成まで200年



ミケランジェロがおよそ2年をかけて大理石の一枚岩から創り上げた、サンピエトロ大聖堂の『ピエタ像』。



### カジボンの墓マイラー巡礼記 [ 絵画・美術編 ]



ミケランジェロ(イタリア)

フィレンツェのサンタクロチェ聖堂にある墓は、「彫刻」「絵画」「建築」の三分野での偉大な実績が3人の女性で表現されている。



グスタフ・クリムト(オーストリア)

金色の装飾、官能美をたたえた作品でオーストリアのアル・ヌーボ一の代表的存在であった。墓石は自身がデザインしたもの。

かかるといわれていましたが、3D技術などの進歩で建築スピードが上がり、今では大聖堂や地下礼拝堂ができ、ステンドグラスの美しさは言語を絶します。バルセロナでは美術館巡りと街歩きを楽しんで欲しい、とカジボンさん。「ピカソ美術館は若かりし頃の『青の時代』の作品が多いことが特徴です。ミロ美術館は1万点の作品を所蔵。街なかを歩くとガウディがデザインしたアパートや公園、街灯と巡り会えます」。

飾った。しかし共同生活の破綻が迫り、それを嘆いてゴッホが自分の左耳を切り取ったと言われている。ゴッホはひまわりの絵を多く残しているが、ゴーギャンの部屋に飾った絵は、ロンドン・ナショナル・ギャラリーに展示されている。

「『アルルの跳ね橋』をはじめゴッホの多くの絵の舞台になった南仏アルルは、古代遺跡が残る歴史ある美しい街で、観光にも最適ですよ。ちなみに、ゴッホの作品のなかで私が最も好きなのは『星月夜』で、ニューヨーク近代美術館にあります」。



世界を旅すると、そこでしか鑑賞できないワン&オニリーのアートにふれることができる。圧倒的な存在感で迫ってくる絵画や彫刻。本物の芸術と向き合うことによって感嘆し、感動し、心が豊かに満たされる。巨匠、鬼才などと称されるアートの巨人の作品を味わうためにも旅に出よう。



バルセロナはアートがあふれる芸術の都。ピカソ美術館やミロ美術館など巨匠の作品にもふれることができる。計画を立てて観光したい。





## まだまだ紹介したい たとえばミュージカル

カジボンさんの運営サイト「文芸ジャンキー・パラダイス」を訪ねるとわかるが、カジボン・ワールドは実に幅広い。ここまで取り上げたジャンルにとどまらず茶器、仏像そしてアニメ、プロレスまで情報が満載だ。「まだ紹介したりないので、もう少しだけ、ミュージカルの話をしましよう」。



フランスの詩人、小説家ヴィクトル・ユーゴー。政治家としても活躍した。パリにヴィクトル・ユーゴー博物館がある。

「たとえばヴィクトル・ユーゴー原作の『レ・ミゼラブル』は世界中で上演されています。パリに行く前に、この作品の鑑賞をお勧めします。映画版も傑作です」。アルゼンチン大統領夫人のエバ・ペロンをモデルに波瀾万丈の人生を描く『エビータ』も世界的に知られている。「彼女は貧困層の出身で、地位ある立場になつても国民から絶大な人気を得ました。墓にも労働者階級から彼女をたたえるプレートが贈られています」。T・S・エリオットの詩集が原作の『キャッツ』も世界中で口

ンゲランが続けている。このほかでは『オペラ座の怪人』、『ジーズス・クライスト・スーパースター』、『ウエスト・サイド物語』などもおすすめ。DVDで鑑賞するのもよいと思います」。

さて、カジボンさんに世界の芸術を語ってもらいながら、旅先での楽しみ方を紹介してきたが、芸術と旅の相性の良さを改めて感じてもらえたとと思う。出航前から寄港地にゆかりのある文学、音楽、映画にふれてみると、世界一周の旅はいつそうおもしろく、思い出深いものになるだろう。



1:ブエノスアイレスにあるアルゼンチン大統領官邸。エビータもここから演説を行った。  
2:エビータの追悼碑「何百万人ものエビータとなって帰ってくる」と刻まれている。



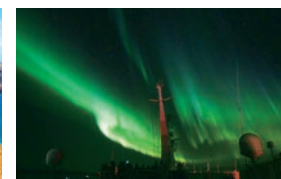
好評発売中



カジボンさんの最新刊『世界音楽家巡礼記』（音楽の友）が発売中。世界の音楽界の巨匠たちの墓を巡礼し、彼らの功績や生き様などがまとめられている。



ガラパゴス諸島（エクアドル）



オーロラ（アイスランド）



リオのカーニバル（ブラジル）



クルーズで巡り会える

## 世界の植物



クルーズの寄港地で、その国や地域ならではの植物観賞を楽しむにしている方は少なくない。自然のなかで生命力豊かに枝葉を伸ばす姿は愛らしく、各地の植物園では多様な植物を一度に見ることができの魅力。日本ではお目にかかれな色彩や造形との出会いからは「生命の神秘」も感じられる。

植物園は、多くの植物が展示され、花と緑に囲まれた憩いの場であると同時に学びの場でもある。世界には個性的な植物園が多く存在しているため、寄港先で世界的に知られるような植物園があれば、足を運ぶことをおすすめしたい。

たとえばイギリスの「キュー王立植物園」は1759年に宮殿併設の庭園として始まり、現在は世界遺産にも登録されている。120万平方メートルの敷地には、世界各国の植物が4万種以上栽培されている。アメリカの「ニューヨーク植物園」は1891年の開館。101万平方メートルの敷地のうち三分の二が天然の落葉樹で、自然がそのまま残されている。約1万5000種の植物が栽培され、全米を代表する研究機関としても知られている。シンガポールの「シンガポール植物園」は都会のオアシスとして人気のスポット。数万本の洋ランを扱うナショナル・オーキッド・ガーデンや植物の進化をたどれるエボリューション・ガーデンなど見どころが多い。



### キュー王立植物園

曲線的な外観が特徴の「パームハウス」が有名だが、このほか園内は気候ゾーンに分かれた展示が行われレアな植物が多い。



### ニューヨーク植物園

園内には50の庭園があり、年間を通して展示会やフェスティバルが開かれている。先端的な「植物研究所」も有している。



### シンガポール植物園

2015年にシンガポール初の世界遺産として登録された。朝5時から夜中の24時まで開園しており、南国の雰囲気が楽しめる。



## クルーズでおすすめしたい 世界の植物園

Botanical gardens in the world



## 情熱的で華やかな 世界三大花木

*The world's three great flowering trees*

さまざまな分野で「世界三大〇〇」といったビッグ3の呼称がつけられるが、花木においても「世界三大花木」がある。「ホウオウボク」「ジャカランダ」「カエンボク」の三種がそれだ。ホウオウボクはマメ科の落葉高木で、マダガスカル原産。樹形は傘形で花の色は燃えるような緋紅色になる。ジャカランダはノウゼンカズラ科の落葉樹。南米原産で50ほど種類がある。カエンボクは南アフリカ原産の常緑高木で、鮮やかな赤い色の花を咲かせる。いずれも熱帯の花木であることから、情熱的な華やかさが際立っている。世界一周中に三種類すべてと出会えれば幸運だ。



※季節により開花が見られない場合があります。



バオバブの木

〔マダガスカル、南アフリカなど〕

童話『星の王子さま』に登場し、マダガスカルを代表する植物。ムルンダバ郊外にバオバブの木が林立する絶景の並木道がある。



サラノキ

〔インド、シンガポールなど〕

2本並んだサラノキ(沙羅双樹)の下で釈迦が入滅したことから、仏教では復活・再生を象徴する聖なる樹。春に爽やかな香りの花が咲く。



ソーセージの木

〔シンガポール、ハワイなど〕

アフリカ原産のノウゼンカズラ科の植物。美しい花を咲かせた後に、ソーセージにそっくりな実をつける。夜になると花開くことも特徴。



ウェルウィッチア

〔ナミビアなど〕

アフリカのナミブ砂漠に分布。和名はキシウテンガイ(奇想天外)。植物体の直径は8メートルにもなり、寿命は1000年以上といわれる。



エリカ・アビエティナ

〔南アフリカなど〕

ケープタウンを見下ろすテーブルマウンテンの固有種。柔らかいモミのような葉と、枝の先端に集まって咲く管状の花が特徴。



キングプロテア

〔南アフリカなど〕

南アフリカ共和国の国花。乾燥した地域に生え、高さは1~2メートルほどになる。プロテア品種最大の頭状花は、現地では周年咲く。



イランイラン

〔レユニオン島、フィリピンなど〕

温暖な気候で咲くジャスミンに似た黄色の花からとれる甘い香りの油は、マリリン・モンローが愛した「シャネルの5番」にも使われている。



ホウオウボク

〔マダガスカル、台湾など熱帯および亜熱帯地域〕

日本では観賞用として温室で栽培されることが多いが、沖縄県などでは街路樹や公園樹として採用されており、高く広く広がる梢に咲く、「鳳凰」の名にふさわしい見事な開花を見ることができる。



マングローブ

〔ジャマイカ、インドなど〕

過剰な伐採や開発で急激に面積が減少している。「命のゆりかご」と例えられるように海の生物の生息、餌場、産卵場として欠かせない。



ヒース

〔イギリス、アイスランドなど〕

もともと荒地の意味をもち、花言葉は「孤独」。荒涼とした土地でも花を咲かせる姿に、イギリスを代表する小説『嵐が丘』が重なる。



ローズマリー

〔フランス、イタリアなど〕

別名ロスマリヌス(海のしずく)。その名の通り小さな花をたくさんつける。温暖な南仏プロヴァンス地方では花を観賞できる期間が長い。



ブーゲンビリア

〔ギリシャ、ブラジルなど〕

南国の雰囲気を出す花。サントリーニ島イアの街はエーゲ海の青、白い建物とブーゲンビリアの鮮やかな赤が印象的である。



ジャカランダ

〔南アフリカ、南米など熱帯および亜熱帯地域〕

「紫の桜」「南半球の桜」ともいわれるジャカランダは、あふれんばかりの青紫の花を咲かせる。ブラジル産の一種は、高さが17メートルにも達し、ブエノスアイレスやチリのサンチアゴなど南米の都市では並木や庭園樹として植えられている。



レインボーシャワーツリー

〔ハワイなど〕

「ホノルルの木」に制定されている。ピンクやイエローが絶妙に混ざり合い、緑の葉と重なると虹のようなイメージで街路を彩る。



ユーカリ

〔オーストラリア、ニュージーランドなど〕

オーストラリア原産。先住民アボリジニが昔から傷の治療に利用してきた。シドニー近郊の国立公園にはユーカリの樹海がある。



ティアレ・タヒチ

〔タヒチなど〕

アカネ科に属するタヒチの固有種。かのゴーギャンは画文集で「ティアレの香りをかいだ者は必ず島に戻ってくる」と記している。



オオオニバス

〔ブラジル、ペルーなど〕

直径2メートル、人が乗っても沈まない浮力をもつ。アマゾンが原産でリオデジャネイロ植物園には「オオオニバスの池」がある。



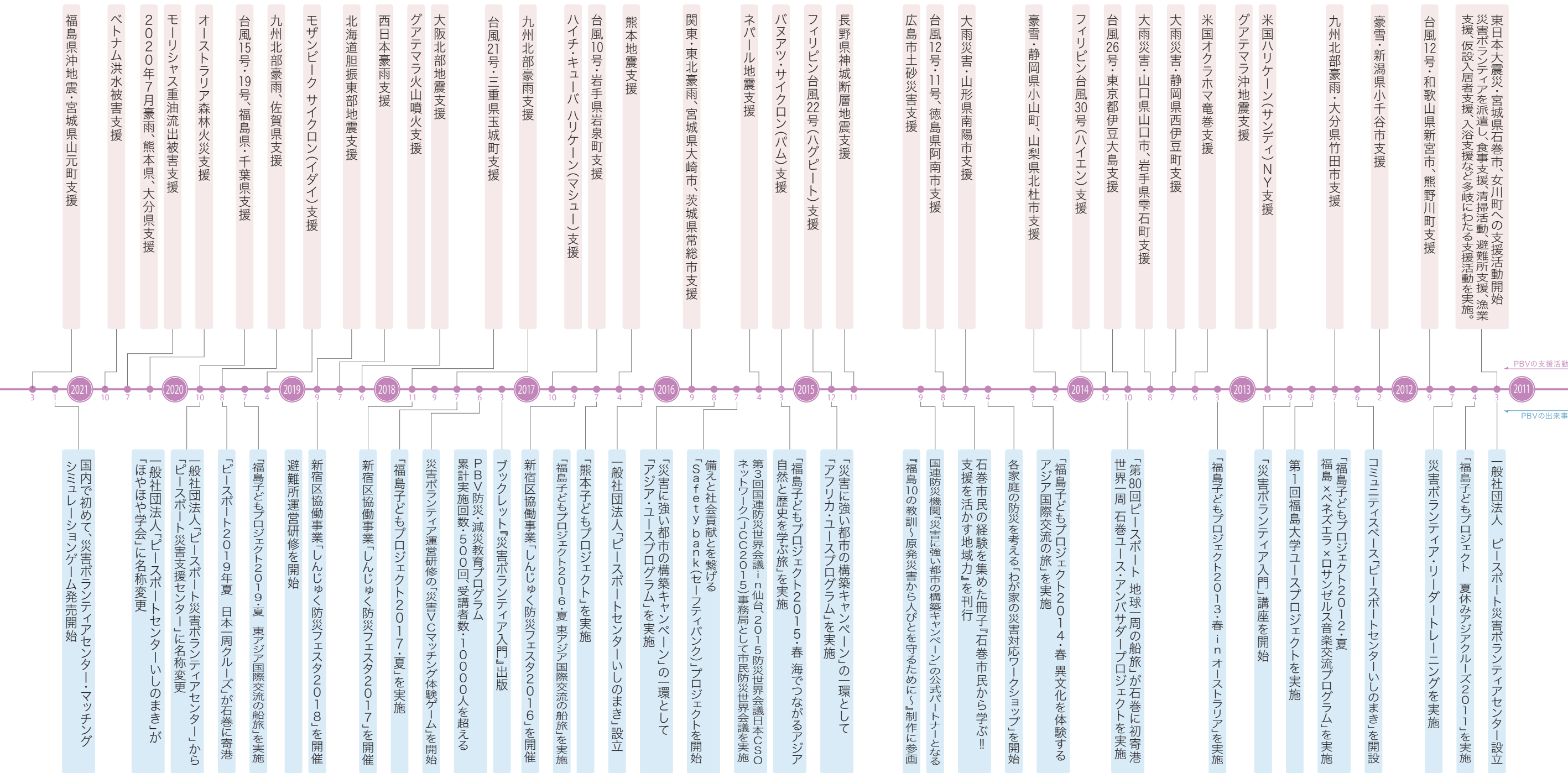
カエンボク

〔ハワイ、ブラジルなど熱帯および亜熱帯地域〕

「火焰木」という和名は、赤色の花が咲き誇ることからきている。花はつり鐘形のチューリップのような形状で、アフリカンチューリップとも呼ばれる。世界中の熱帯地域で植えられ、花色が黄色の固体もある。







東日本大震災から10年  
ピースボート災害支援センターの歩み

ピースポーターは、国境を越えて世界各地の被災地で多岐にわたる支援活動を実施してきた。2011年の東日本大震災を受けて、災害支援を専門とするピースポーター災害支援センター（PBV）を設立。これまでに約10万人を超えるボランティアと共に、海外では31カ国、国内では54地域で支援活動に携わってきた。





## ピースボート災害支援センター10周年

# 東日本大震災と コロナ禍の7月豪雨災害 かつてない被災地支援について

ピースボート災害支援センター(PBV)の10年の歩みのなかで、ここでは東日本大震災とコロナ禍において発生した熊本の豪雨災害を取り上げる。いずれもかつてない被災地支援が展開された点に共通点があり、PBVがどのように機能したか振り返りたい。

### 未曾有の 災害への段階的支援

ピースボートの災害支援活動は阪神淡路大震災から始まっているが、PBV設立の契機になったのは東日本大震災である。未曾有の災害が発生した6日後の3月17日にはPBVスタッフは宮城県石巻市へ支援に入っている。現地の責任者を務めた現PBV理事の小林深吾さんは「被災地の壊滅的な被害のなかで支援はいくつかの段階を踏んでいきました」と語る。最初は支援団体が個々に被災地に駆けつけて、できることから支援をはじめた。被災者の方々の食事、物資配布、家屋

の清掃などをはじめ、やることは山ほどあった。

「助けを求める声に応えることで精一杯の日々から一定期間経つと、たとえば別々の団体が炊き出しを同じ場所で行うという状況で、支援が重なってしまうケースも生じてきました。そこで石巻専修大学を拠点に支援団体がネットワークを構築していきました」。そこで各団体の活動が効率的になり、それぞれの得意分野を活かした計画的な支援が展開された。小林さんは支援団体と自衛隊との連携窓口になり、さらに石巻市役所も含めた調整役を担い、毎週開かれる三者会議に参加した。「三者連携によって、よりいっそう系統だった支援につながっていったと思

います」。そうしたなかでPBVは泥だらけになった家屋の清掃、避難所の清掃、さらには漁業再開に向けた準備、地域情報を盛り込んだ仮設住宅への新聞の発行などを行っていた。

「次の段階としては、街づくりを推進する人たちと地域連携を図りました。本当の意味での復興への取り組みに移行していったわけです。私は2016年まで責任者を務めました。その後は新たに「ピースボートセンターいしのまき(現在ほやや学会)」を設立しバトンを渡し、今日に至っています。現在もさまざまな地域課題解決のために奮闘しています」。小林さんの話から、現地での支援が時とともに変化、進化していったことがわかる。

### 複合災害における 支援の難しさ

災害支援の長い経験から、小林さんが最も感じている「進化」とは支援団体と行政、地域との三者連携の在り方だという。しかし、今回見舞われているコロナ禍ではその機能を発揮するのが難しい。昨年末誌で紹介したようにPBVは熊本県と球磨村からの要請によって避難所運営のサポートのため8月末に現地入りした。感染症対策のガイドライン、専門家のサポートなどによって支援が可能になった。限られた人数で、少しずつ避難生活の改善に貢献してきたが、現地支援の絶対数が

少ないという実感もある。

「県をまたいでの移動に制約があり、災害支援に必要な不可欠なボランティアによる支援が行き届きません。現地からも、片付け一つとってもスピードが遅い、という声が届きました」。被災者の方々には「支援を受ける権利」があり、本来はもっと多面的なサポートが必要ではある。しかしその一方で「新型コロナウイルス感染症に脅かされない」という前提がある。この二つの両立が命題である。コロナ禍と豪雨という複合災害において、「手探りの支援」が続けられた。

最後に、個人的な考え、として小林さんから10周年を迎えたPBVのこれからについて話してもらった。「PBVでは多様な専門性をもった人が災害支援に関わってきました。団体としては複数の専門性を持ちながら、被災者の多様なニーズに対して手を差し伸べられる担い手がいるほうが良いと考えています。

地域でネットワークをつくっておけば万の際に助け合える。コロナ禍の教訓から、今後、地域連携の大切さを訴え、全国的に広げていきたいと考えている。

### ボランティアの コミュニティをつくりたい

多くの人が経験を積むことで、自分が住む地域で災害が起こったときにそのノウハウを還元することができ、今後ボランティア間で情報交換できるようなコミュニティをつくっていききたいですね。また現場に行けない方もいるので、その気持ちを受け、逆に支援を受ける立場になったとき手を差し伸べてもらえるような仕組みも機能させていきたいです」。

## ベトナム洪水被害 PBV活動報告



ベトナム中部地方では昨年10月から続いた豪雨・台風によって洪水や土砂崩れなど甚大な被害を受けた。支援を必要とする人は150万人以上にのぼるとみられている。ピースボートはこれまでのクルーズで20年以上、港町ダナンに寄港し交流を重ねてきたが、その企画・運営を支えてきたのがダナン青年連盟である。今回の被害において青年連盟のメンバーは、発生直後から飲料水や日用品などの物資配布を実施してきた。ピースボートのカウンターパートナーであり、交流し友情も育んできた青年連盟をサポートしていくため、PBVとしても当初より支援を継続してきた。しかし家屋を失った方も多く被災地の再建には長い支援が必要である。今後も現地と情報交換しながら必要とされる支援を実施していく。



## 災害につよい社会をみんなでつくる お互いさまサポーター



災害は、いつ、どこで起こるのか予測できない。誰もが被災者になる可能性がある。PBVでは今、被災地に支援に行くことができなくても、寄付による支援を続け、もし被災した際に、助け合える「お互いさまサポーター」を募集中。お互いさまのつながりで、災害を一緒に乗り越える社会をつくりたい。

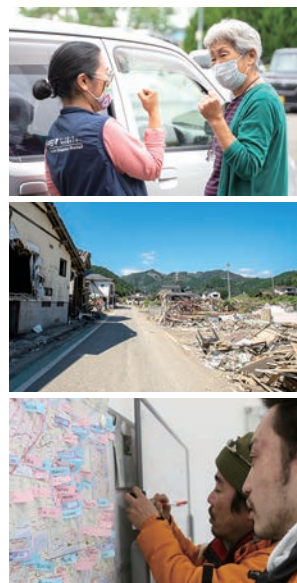


1,000円～[毎月寄付]



ピースボート災害支援センター

[公式サイト] <https://pbv.or.jp/>





# 船上百景 [社交ダンス]



カルチャースクールで毎回トップクラスの人気を誇る社交ダンス。ダンスパーティー也大盛況!

## 憧れの社交ダンス

### この機会にマスターしよう

船内で開かれるカルチャースクールは多くの参加者を集めている。3カ月の船旅は新しいことをマスターできるチャンスでもある。なかでも人気のあるプログラムのひとつが社交ダンス。「いつかチャレンジしたかった」という人も多い。特にシニア層の関心が高く、ご夫婦で一緒に始めるケースも少なくない。初心者大歓迎の、敷居の低さも魅力だ。先生による丁寧な指導で、着実に上達するのが継続していけるポイント。「踊ってみた」という好奇心が、「ダンスは楽しい」という実感に変わって夢中になっていく。ブルースからジルバ、タンゴ、ワルツとマスターする振り付けも増え、いつしか船内ではレッスン仲間と自主練習している姿もよく見られる風景に。定期的に開かれるダンスパーティーや発表会は、練習の成果を披露する晴れ舞台。華やかな衣裳に身を包み、さあ楽しみましょう!



レッスンを通して友だちの輪も広がる。



世界一周を終える頃にはステップも軽やかに。



「ハート・オブ・サムライ」という本が米国でベストセラーとなり、中高生から「ジョン・マン」と呼ばれる日本人。幕末に活躍したジョン万次郎といえはわかりでしょうか。今号で登場したカジボンさんに影響され、自宅近くにある万次郎が眠るお墓へ行きました。1841年、土佐の漁師で14歳の時に漂流。捕鯨船に助けられ、その後は異文化のなかで英語を学び、米国の大学を首席で卒業。航海士として世界を二周した後、母親に会いたい一心から危険を承知で鎖国時代の日本へ帰国。その後、幕末の動乱期に多大なる影響を与えます。

そんな彼が漂流時にたどり着いた伊豆諸島の無人島・鳥島では、水も火もないなか5カ月間も生き延びます。雨水を貯め、鳥や魚を食料としてサバイバルするのですが、何より彼に力を与えたのは「希望」でした。

その無人島には江戸時代だけで10年間に2〜3組の漂流民が流され、約2000年の間に80人以上が帰還を果たしています。なかには20年間もその島で暮らした人もいました。その生還者たちが島を脱出するとき、未来の漂流民に向けて、そこで生き抜くための道具やメッセージを残したのです。そんな命のバトンを見た万次郎にとって、それがどれほどの希望となったことか――

未だコロナ禍で先の見えない日々が続きますが、万次郎のように「希望」をもって、一日一日を前向きに過ごしていきたいと思えます。(N・I)